

の文藝の動きは、主に中國文壇によつて左右されて居る。これを顧みるに其の當時に於て中國の創造社が文學革命標幟を立ててから、その影響が當然滿洲にも波及して來た。そのため一般作者の多くは、小資産階級に在りながら自發的にその資産階級より離脱して、無産階級の立場に立つて階級對立を宣傳する無産文學を書いて居る。但し一方に於いて時代の要求、竝に社會現實の情況から又一種の執烈なる感情を抱いて民族奮起の爲の文章を書きやうな作者も現はれて來たのである。要するにその時期に於ける作品の大多數は従前よりも抒情的な文藝を改めて今度は宣傳の手段に振向けて居たのであつた。

第十七期の『關外』などは一般の讀者が手にすれば直ぐ解ることだが、その内容はもと／＼無産文學の旗幟を高く振り翳して毫も忌憚する所がなく、彼等の態度を表明すると共に當時の文藝の赴くべき新途を指義してゐたのであつた。その爲に直ちにその筋の命令により停刊の憂目に遇ひ、落日の如き運命となつたのである。

然し乍ら無産文學は此が爲に消滅されたのではなく、むしろ反つて益々其の勢力を増加し、例へば『氷花』、『霧』、『現實』等の雑誌は何れも齊しく無産文學に對する努力を續けてゐた。

只雑誌そのものが憐れな程貧弱で、又長い壽命を保つことも出來ないで間もなく消滅し去つた。然しこれらの雑誌中『氷花』だけは比較的長期間に亘つて發行され、尙且新興文藝の理論に付毎期に詳しく紹介して相當の成績を擧げて居た。創作技術の上では未だ幼稚であつたが、その制作意識だけはもはや漸次確立されて來て、文藝の現實性を把握するに至つた。

これを又民族主義的文學に付て見ると、『遼風』と『勁草』との兩雑誌の出版があるが、その作品の内容は一種宣傳性のそれとて、本書の情理を盡した作品はなかつたが、これらの中で末樹人氏作「櫻花第一枝」と云ふのは民族文學の傑作と云ひうる。作者は提唱者の有力なる一人であつて又『遼風』及『勁草』の編輯者でもあつた。作者は「櫻花第一枝」の自叙中に次のやうな事を書いてゐる。

「我が宗教は救國なり、我が人生は救民なり。救國のみ知つて其の他の一切を顧みん」と云ふのが我が人生主義なり、愛國文學を宣傳鼓舞するは我が終生の目的なり」

但しこの作者の作品は大方驗觀な作り事で、人生の眞實を描き得ず、詩に至つては徒に詩句の堆積に止まり、毫も深刻な感銘を與へ得ない。

この二種の主要な思潮の他に、個人の專集中、これの影響を受けないで自己を表白する文章を書いた人も少くない。鮮文の「稻陵紅葉」の如きは、即ち純粹な自由的作品で、如何なる主義の束

縛をも受けてゐる。

鮮文の作品は完全な頹廢感傷の情調で、當時の中國作家郁達夫氏の影響を強く受けた所が見受けられる。衰弱した病的な筆致を以て放浪且つ無節制的な頹敗生活を描いてゐる。小資產階級の立場に立つて自己の生活を赤裸々に表現し肉慾色情の描寫に對しては殊に手馳れたあとが見られる。

『昭陵紅葉』と同時に出版されたものに『舞妓の「風紋」』があり、其の作品内容は均しく主觀の論い抒情的な筆調を帯びて居て、主題の表現に完全な構成がなく、篇中何れも暗い蔭があり、且つ又物語に於て常に主觀的に自己の議論を挿入する爲め全篇の意識統一が缺如してゐた事が屢々であつた。

集後に「廢言三題」を附してあるがこれは三篇の雜文で、作者は故意に社會に對して冷罵嘲を加へてゐるのであるが、いさゝか滑稽に過ぎた爲め全く失敗に歸してゐる。

新詩集の出版に關しては、林雲龍の散文詩集『鮮血』及び張露薇の詩集『情曲』等があつた、これらの内容も矢張り淺薄な悲哀と感傷的な字句を連ねたものであつた。

張露薇の詩體は當時の文壇では大變流行した。行毎に字數を整然と揃へ對句になつて居る。それで「此れはまるで豆腐の並べ方だ」と嘲笑されたことがあつた。この作者の詩は人々から惡魔派だ

と惡評を受けた。それは詩中に血屍、白骨、魔鬼、毒酒等の字句が充満されてゐたからである。

この外に又張露薇の長詩集『苦訴』と云ふのがあつたが、内容はこれも又單純な苦悶と情感的な表白に過ぎなかつた。

張露薇の詩體に良く似寄つて居るものに張露薇の『落葉之笑』と云ふがあつて、これは民國十九年の出版であつた。詩の内容は僅かに自然の美への詠嘆と淺薄な戀愛感情に限られて居た。

民國十八年から十九年の間に發行された雜誌は『北國』『嚙語』『怒潮』『南郊』『紅葉』等の小雜誌で、内容も非常に貧弱で殆どが一、二回を過ぎずに廢刊してしまつた。

かくの如く「東北文壇」の發展過程は後に民國十九年九月十八日の事變當時迄は政治の停滯に從つて完全な發展の跡も見られず、秋風に吹き散らされた落葉の如く僅かな存在であつた。

二、建國後の文藝

事變後の文壇は一時は突然衰頹的狀態に陥つたのであつたが、しかし一度その沈滞を経た後、終に一つの新活躍を示し出した。事變翌年の春微風の吹きそめる頃には文壇も次第にそれに誘はれる如く更生した。但し文藝の形態は再び初期の狀態に退嬰して専ら新聞級の副物として寄生してゐたに過ぎなかつた。久しく荒廢してゐた藝園には更に新らしく種子が蒔かれ、多くの作家は何れも滿

週報の「星期副刊」を以て活動の地盤と做し、僅かに作品を発表した。しかし長夜の如き沈黙を續けてきた文壇は、作品の發表があるとは云へ、満足を得らるゝ作品は見られなかつた。

それでも當時最も活躍した幾人かの作家中、**菊園**、**實地**の創作並に**讀月**、**希文**の批評の如きは實に文藝愛好者の注意を喚起するに足るものではあつた。當時の作品を見ると粗雑の感はまぬがれないが、然し事變前の作品に較べて誇大空虛の弊は少くなつた。そして幾人かの作者は現實の題材の練選を企てたが、これを適確に表現することが出来ず、何れも重苦しい形式となつた。

復活後の新聞紙副刊は滿洲報の「星期副刊」が稍可なりと言へるが、その外に又泰東日報の「文藝週刊」及び民報の副刊があつた。但し後者は比較的幼稚且つ通俗的であつた。

大同元年の末頃になつて當時の文壇には突然一種の新らしい現象が現はれた。と言ふのは發表作品の後に、時として「○○社」と言ふやうな名稱が附されてゐた。但しこの「○○社」と言ふのは、何の組織もなければ又なんの計畫もない、只幾人かの文藝を愛好する青年が一緒に集まつて、「社」を以て彼等の團結を代表する外にはなんの意味もなかつたのである。この社の組成は漸く熟して、終に社刊を發行するやうになつたが、しかしその力は未だ非常に微弱であつた。その最初に**冷翁**あり、大同二年民報副刊によつて「冷翁」の刊行があり、内容は詩を以て主體と爲し、形式

及び内容に精巧を凝らしたが、寫作の態度は超然的抽象的で、所謂架空藝術であつた。因つて多くの人々の不滿を招き「冷翁」の詩を以て朦朧と批評した。「冷翁」の中堅分子は**成雪竹**、**馬慶壽**等で、社刊上に幾多の新詩を發表した。

「冷翁」の刊行に續いて撫順**潤澤**社が生れ撫順民報の副刊によつて**潤澤**の創刊を見た。主なる同人は**秋聲**、**寒風**氏で、僅かに六回を出して廢刊してしまつた。内容も幼稚且つ非常に空虛であつた。

その後民報副刊に**寒風**と云ふ新社の出現を見たが、是は理論を以て主となしてゐた。新聞紙副刊に依つて社刊を出版するやうになつてから暫くして、**白光**社と**潤澤**社が大同二年に於

て更に一步進んで獨立した社刊を發行した。但しそれは憐れな程薄い本で、内容の貧弱も又甚しき。「白光」が僅か三回發行するに止り、「潤澤」は一期にして廢刊した。

此處迄書いてきて今度け當時の北滿文藝に筆を伸ばすが、ハルピンは實に北滿作家の活躍地と言ふべきところである。而もハルピンに於ける作家の作品は、南滿に於ける作家のそれに較べると確かに優れて居る。「國際協報」副刊の「文藝週刊」の如きは、曾て幾多の優秀な力作を掲載した。北滿に於いての比較的傑出した作家は、先づ**三郎**、**情陰天婦**を推さねばならぬ。この二氏は現在も

やはり蕭軍、蕭紅をペンネームとして中國の文壇上に活躍しつゝある。

當時二氏は、會て合作した短篇小説集を出した。『跋渉』といふ題で、作者の創作態度は終始執拗的に現實を把握して居る。内容は多數の被辱者及び壓迫を受けた連中の如實な生活描寫である。作者の技巧は未だ成熟を缺如してをるけれど、題材の選擇及び嚴肅な作風は確かに當時文藝愛好者の注意を喚起し、相當の好評を博したのであつた。

之と同時に新京大同報に更に『夜哨』の出版があり、この雑誌は三郎等の北滿作家を中心に居り、内容は當時の他の新聞紙副頁、社刊に比して確かに高度の水準を備へてゐる。

康德元年より二年迄の間は、新聞紙副葉によつて社刊を出版する風が、依然として其の儘つゞけられてゐる。泰東日報によりて大連響濤社が出版した『響濤』、民報によりて平凡社が出版した『平凡』及び營口の營商日報によりて前後出版した『野火』、『黒光』並に『每週文學』の如く殆ど數へ切れない程多かつた。新聞紙の副葉にして滿洲報の『曉野』、『北國文藝』及び民聲晚報が創刊した『文學七日刊』の如きは何れも當時ベストの文藝副刊となつて居る。

康德元年『鳳凰』の創刊に當つては、當時の文壇に正に最大の注目を惹起し、國內唯一の大型雜誌となつた。『鳳凰』の内容は純文藝とは言ひ難いが、毎回文藝作品に關し相當の紙面を提供し

た。

その後これは量の方を減少したけれど、内容は矢張り文藝性を失はない。尙『鳳凰』の發行により更に數多くの有望な作家を生み出した。前期に於ける尹鳴、張蕭鐵の如き後期に於ける努力等の如きがそれで、作品は形式及び内容とも均しく幼稚の段階を脱却した。

『鳳凰』出版の後を繼ぎ、定期刊行物はぐんぐんと榮えてきた。奉天の『浪女之友』、『新青年』の如きは文壇の貧しさを一時飾つたばかりでなく、而も壯麗な發展を遂げつゝいて作家も輩出し、一時は非常な活躍をした。

三、近年來の文藝

康德四年になつて雑誌『鳳凰』は終に廢刊した。これは當時の文壇にとつて最大の損失と言ふべきである。尙國內の各新聞紙は弘報協會の言論統制政策に基き、これも大部分廢刊となり、その爲に文藝界にも自然影響を及して落寞たるものとなつた。但しこのときに於いて月刊『明明』は却つて異軍突起の姿を以て凋落一方の道を進る文壇を背負うて出現した。『明明』の出版は更に強烈な新文藝性格を表現し、一方に於いては大膽に舊文學の既存餘勢を攻撃し、一方に於いては又新文藝の生長の培養に盡力したのである。

この『明明』の強靱な苦闘により、更に幾多の有力な作家を發見し、重要な地位を確立した。吾
 丁、疑運、小松、袁犀、石筆氏の如きは、皆當時の『明明』に於いて最も活躍した作家達である。
 各作家は夫々異つた風格を持つるとは云へ、このときに於いて一種共通な主要な思潮を形成して
 ゐた。即ち暗い描寫で、作中に陰鬱な雰圍氣を充滿させた。『明明』に相對する雑誌は、即ち大同
 報の『文藝專頁』で、兩派は一種の對立形式を取つて居り、作品の内容も相互に摩擦してゐた。明
 々社は更に城島文庫を出版し、續いて幾種かの專集を出版した。舉げてみれば古丁氏の短篇小説集
 『奮飛』、雜文集『知半解』、疑運氏の短篇小説『花月集』、小松氏の短篇小説『編蝠』、百靈
 氏の散文集『大光』等である。

この一種澎湃たる氣運は、僅か一年しか持續することなく、『明々』廢刊と共に終りを告げたが、
 康德六年に到つてもこの充進的情緒のほとりは未だ全く冷却せず、遂に『明々』時代の若干の作
 家は再び藝文志事務會を組成し、大型季刊『藝文志』なるものを創刊した。但し『藝文志』の出版
 は依然として新文藝性格を失はなかつたが、もはや『明々』時代の執拗と強靱な精神は疾に消失し
 去つた。而も内容上から觀察すれば却つて舊文藝と手を相携へるが如くである。

『藝文志』は前後を通じて三回しか發行してゐない。就中主要な創作は古丁氏の『平沙』と爵青
 氏の『麥』で、何れも八萬字位の中篇であつた。

其の次は小松氏の『浦公央』と『鐵檻』で、量に於いてはかれこれ四萬字位もあつた。然し中較
 的好評を受けたのは爵青氏の『麥』で、創作の技巧上から見ても爵青氏は確かに相當の成功を收め
 たと云へよう。

その後『藝文志』事務會は更に『讀書人連義』なるものを四回ほど出版した。内容は主に批評及
 び短論を重んじた。

以前大同報の『文藝專頁』に活動してゐた諸作家は、『藝文誌』と同時に文藝刊行會を組成し、
 『文藝』季刊の出版を計畫した。實現には到らなかつたが、その後は却つて個人專集の方向に向つ
 て發展を求め、前後を通じて文藝叢刊を四種程出版した。即ち吳映の短篇集『兩極』、山丁の『山
風』、梅娘の『第二夜』、秋登の『去故集』等がある。

奉天に於いては更に文選刊行會より季刊『文選』を發行した。形式は『藝文誌』と同じ大型雜誌
 であるが、内容は『藝文誌』に較べて遙かに生氣があつた。該會は『文選』の外は『毎月叢編』を
 『二回』發行したのが即ち『文叢』、『文韻』で、これ又評論を偏重した小型雜誌であつた。一昨年
 に到つて更に文選叢書兩種を出版し、秋登の短篇集『小工車』及び袁犀の短篇集『泥沼』がそれで

あつた。

康徳八年詩季報が『詩季』を創刊してから滿洲の詩運も一時に高まつたやうであつたが、新詩そのものが滿洲に於いてはどうしても理解されないもので、近時はまた落寞の清態に陥つた。

次に最近二、三年以來は、創作界の健全な發展を目指して滿洲に於いても長篇小説に試みに手をその人があるはれ、已に出版された本の中に小松の『無花果の毒』、『北歸』、秋螢の『河流の底』、『及び石軍の』、『沃土』等がある。

『藝文誌』が發刊されて以來、滿洲の文藝は新聞紙の副刊から離れて夫々異つた集團を形成するやうになつたが、然しそれも最近一年來は出版の困難が伴ふことが原因すると思ふが、又均しく熱と力を消失して沈黙の状態に在る。

さて終りに滿洲文藝の發展を總觀するに建國前の文藝は内容に於いて熱情的強力に充ちてゐるけれど、作品は尙幼稚の域を脱却し得ず、建國後の文藝は、只一種の浪漫的個體の發展で、作品としてはやはり幼稚であつた。其後最近の三、四年に到つて滿洲の文藝は始めて軌道に乗つて堅固な地位を立したと云ひ得る。

秋螢君は滿文の『滿洲文學史』を書き、滿洲圖書會社では近く刊行すると預告してゐるのだが、稿執筆時までにはまだ出版されてゐない。それが出れば、我々はより詳しく滿系文學の歴史について知ることが出来るであらう。

今は乏しい資料と、私自身が経験したことによつて、本章を綴るはかはない。

秋螢君の前引「史話」は古い部分を説いて割合に詳しく、その新しい部分に關してはかなりザツと述べてゐるやうに思はれる。

古い部分で、哈爾濱の國際協報に於ける三郎（すなはち蕭軍）の活躍については、私も讀み、知つてゐた。昭和四、五、六年の頃だつたと思ふ。それは、私が職として、滿洲、支那の主要な漢字新聞にも眼を通してゐた頃だからである。

次に、別な資料として、歐陽博といふ署名で『鳳凰』に載つた『滿洲文藝史料』の一部分を紹介して置こう。前引秋螢君の文章と重複する點もあるが、やはり参考になると思ふ。

「五四」は中國の劃時代的な一つの運動であつた、その影響は全社會意識形態に波及した、ただ

に政治の上のみならず、文藝上にも新しい種子を蒔いた。それは新興分子の舊存關係に對する反抗であつた、殊に一般小市民はこの波の揺れるのに乗じてようとした、この想像は後には悲劇をつくる結果となつたが、しかし今や一切の動向が其處から發生した、といふのが「五四」を出発點として形成された多くの流派である。いま暫らく文藝について言へば、白話文の提唱から、進んで新文學の建設となり、前には古典の繩索下に束縛されてゐた思想と形態がみな自由に表現されるやうになり、その後社會經濟の變轉につれて、國外文學の紹介と新興文學の寫作も相當の成績を得るに到つた。だから「五四」は文藝上の新生期であつたと言つて宜しい。

滿洲では過去に於いて因より所謂文學は在つた、だがそれは若干の特殊な人の利祿を謀取するための工具、或ひは茶餘酒後の消遣品であり、時形的であつた、特殊な人間の手に握られたものであつた。眞の平民化として新しい生命を有つ文學の生産はやはり「五四」の波によつてもたらされたのであつた。勿論「五四」の波が滿洲に流れ來り得たのは、やはり滿洲の當時の一切がこの波を受け容れ得たからであつた。そしてこの新文學の具體的表現は當時の幾つかの新聞の上に見られた。

凡そ過去の滿洲文壇に心を留めてゐる人は記憶してゐるであらう、一九二三年以前に、盛京時報の編輯部第一、民衆の副刊、民衆の副刊……みな新しい作品を載せ始めた。それらの一部は固より

平津各地の新聞から取り來つたものであつた、だが滿洲人の作品がやはりその大部分を占めてゐた、各品は固より好いものはなかつた、しかし新しい生命は確かに断片的に表現された。就中盛京時報の編輯部第一、民衆の副刊は、少なからず文藝に關する理論を紹介した。

一九二〇年以後は、まさに小市民が眼覺めた時代であつた、當時小市民はまだ過重な經濟壓迫を受けてゐず、彼等の切實な問題は婚姻問題であつた。一般青年たちは殆んどみなかかる苦痛を嘗め、當時の父母はまた少しも自覺しなかつたので、依然として彼等の子弟を處置しよとした、しかし當時の子弟はすでに部分的に覺醒してゐた、彼等は戀愛の甘さに憧憬し、舊家庭の束縛を厭ひ、毫も知識を有たぬ自分の女房を憎惡した、このやうな思想が甚だ普遍的に當時の青年たちの心に流れてゐた、それ故初期の滿洲文藝作品は婚姻問題を描寫したものが多數を占めてゐた。たとへば盛京時報の「結婚記念集」の「等當選は父母の心」(作者の名を忘れた、吳といふ姓だつたやうに思ふ)で、この小説は當時の文藝作品の代表的なものであつたと言へる、そのやうな題材が當時の一般作者が描寫した對象であつた。

家庭戀愛の作品を除いては、すなはち東北舊政權に反抗ある意識を藏した作品であつた、當時の東北の政權はまだ充分に封建的であつた、毫も開明的な施設は存しなかつた、一般民衆の受けた壓

迫は非常に重大であつた、就中剽匪の軍隊は田舎を騒がした、多くの者がこれらの題材を取つて小説を書いた、當時の軍閥の罪惡を諷刺し暴露した。それに、時代の啓視のために、小市民は前途の光明を夢みてゐた、希望と青春の火に満ちた作品も少数ではなかつた。その他に、『禮拜六』『玉梨魂』(大内註——上海の美辭佳句艶情小説を指す)一派の文學の影響を受け、才子佳人の香艶哀情を寫したのも若干あつた、要するに、滿洲初期の文藝作品は四つの大きな類に歸納出来る——家庭戀愛もの、舊政權に反抗したもの、希望に満ちたもの、香艶哀情ものである——これにはみな社會經濟的な根柢があつた。——封建社會が頽毀しブルジョアが抬頭した時期の意識形態であつた。

當時、作者が續出し、研究者——或ひは嗜好者と言つてもいゝ、が増加し、文藝團體も自然數多生れた。だが當時のこの類ひの者は殆んど學生と小職員に限られてゐた、各學校に於ける三人團、五人團が非常に多かつた、そして社會で表現されたのは、奉天基督教青年會の文學研究會、及び奉天黎明學會であつた。組成分子に至つては、前者は學生が多數を占め、後者は學校の教員、新聞社の記者及び各機關の小職員を包含してゐた。前者は『奉天學生』(定期刊行物)、後者は『啓明學報』(?)を以つて、彼等の作品發表の地盤とした。この二つの團體は一九二五年以前の滿洲の唯一の文化團體だつたと言へる。

我々はいかなる時代の藝術もみな社會的「クラス」構成を反映してゐること、一定の「クラス」に適應してゐること——大體に生活を支配する「クラス」の要求に適應することを知つてゐる。同時に作者自身は彼が意識してゐると否とに拘らず、總じて彼が屬してゐる一群を代表してものを言ふ。前者は一般小市民の代表であり、小市民的氣味が非常に濃厚であつた、後者は新興分子の代言人であつたと言へる。新興分子の要求と色彩を溢れさせてゐた。因よりこの二つの形態はまだはっきりと彼等の分子の一切を明確に表現してゐたのではない、だが彼等が代表したのは確かに上述のやうであつた、それはその後のこの二つの團體の幹部の人生行路を見れば判るところである。

滿洲の文藝界の初期の作者は甚だ多かつた、彼等の作品は何も好くはなかつた、評價にも値いしはならない。これらの作者の出身は殆んどみな小市民であつた、彼等は時には現在を呪ひ、將來に憧れた、時には弱小者を憐憫し、時には個人の幸福を追求した、時には憂鬱となり悲觀し、時には甚だ大きな期待を抱いて偉大なる時代の蒞臨を希求した。彼等は社會に對して深い切な認識を有しなかつた、大半は學校の窓から社會を覗いてゐた、そのため書かれたものは内容に於いては空虚であつた、技巧について言つても甚だ拙劣であつた。これら一群の作者中、私の記憶にまだ思ひ出され

るのに金小天、郭心秋、李笛晨、趙雖語、趙鮮文、郝心易、趙石溪、周篤溪、周東輝、屈以誠、蘇子元、楊子秀、孫日急、王蓮友、吳以伯、羅慕華、張重行……等がある、私はこれらの人々の身分を悉くはよく知らない、とともに彼等の當時の作品も今見付からない、で、一々詳しく批評することが出来ない、しかしこれらの人々は殆んどみな當時の學生であつた、彼等の作品はみな小市民の産物であつた、この點は私は斷言出来るのである。

一九二五年になると、社會に又新しい轉變があつたために、新しい思想が又流布され出し、影響の及ぶ所、滿洲の文藝界もいろいろな新しい形態を示すに至つた。一九二五年以前の一般小市民の思想は殆んどただ新時代に憧憬してゐ、新しい時代の到來を待つるだけであつた、一九二五年になつて社會的な變つもの大事件の刺戟と教訓とから、待ち憧れるのでは大した希望も持てないことを知り、若干の前進分子は實生活の中に入つて行く必要を感じたのであつた。これは歴史の法則である。歴史がすでにこれらの人の方向を決定したので。

當時滿洲の文藝作者で、實生活に入り込んだ者は甚だ多かつた、また實生活には入らずして新しい光輝の下に自ら喜んでゐた者もあつた、それ故この時期の作品は殆んどすべて生氣勃々としてゐた。民報副刊、『青年翼』、哈爾濱晨報副刊、就中、哈爾濱日報副刊に載つたものは、數多く新しい

い力を含んだものであつた。同時に一般作者の文學的理論と世界の作家についての紹介の仕事も着手し進行し始められた、一九二五年(?)民報副刊に載つた「世界八大文學家評傳」(作者は多分周君であつた、但し上海で出版されたもの及び英文から抄譯したもので、三ヶ月續いて出た)、及び一九二六年、哈爾濱日報副刊に出た「明日之文學」(作者は東瀛、半ヶ月續いた)、及文藝界がすでに世界の作家の生活、修養、作品、について知ることを求めてゐる、ことを示し、後者は滿洲の文藝界がすでに新しい方向へ移動しつつあること、その一部分ではあつたが、そのことを示してゐた。

一九二六年の夏になつて、一つの新しい文學團體春潮社が奉天で組織された、だがその組成分子は滿洲の文藝研究者に限られずに、多くの北滿の文藝研究者を包含してゐた、幹部は周篤溪、周琴博等の人があつた、この文藝團體は過去のよりは稍組織化されてゐた、それに大衆藝術といふことを主張し、参加者は百餘人あつた、出した雑誌は『漫聲』で、『漫聲』の第一の論文は……(原文四字欠)を高唱したものであつた、不幸この團體は翌年の初春、自發的に解散した、『漫聲』は一號が出ただけであつた、その後は出なかつた。しかしこの團體の分子は依然各新聞紙上に彼等の作品を發表した、また『青年翼』を地盤として、具體的に多くのものを發表した。

し、一つの流れは小市民的根性を固守し——或ひは牢騷を發洩し、或ひは彼等が認むる所の光明を追求し——てゐた、その實、この光明が彼等に與へたものはただ幻滅であり、或るものは悲しみ傷んでゐた。

過去の作者は或る者は實生活へ走り、或る者は滑り落ちて行き、すでに續けて書かなくなつた人々もゐた、新しく起つた作者張露薇、白曉暈、程霖融、李別天、秋濤、朗烟、翁贖、黃旭……の如きは、みな甚だ努力して不斷に書いた、好い作品は依然あまり多くはなかつた、ただ量の方面ではいかなる時期よりも多かつた、同時に各學校の校刊も前後して出た、内容は自然に文藝が主要地位を占めてゐた。

一九三〇年秋に至り、滿洲の農村はすでに實質的に恐慌の路に入つてゐた、その年は豊作だつたが、しかし穀價は特別に廉く、農民一年の辛苦の代價は一年食ふのに足りなかつた、各地には土匪が繼いで生じ、商號の倒閉も愈よ多く、黄金の國として著名な滿洲が、すでにその没落と恐慌を表示した、錢値は各處で人を食つた、社會的不安は甚だ顯然と浮動してゐた。このやうな大きな時代が到来しようとする前夕を、數人の感覺の鋭敏な作者はすでに感じ始め、農村に向つて材料を尋ね求め、この恐慌をすつかり暴露しようとした。當時の作者の中で丁煥文が、すなはちその一人であ

つた、彼は農村恐慌を題材とした數多くの小説を書いた、運用上、表現上にも十分巧妙ではなかつたが、しかし農村の底蘊——余滿洲經濟の基礎の動搖といふこの事實は作者に認識され、表現されようとした、それを確かに不可避であつた。

この年の春、泰東日報は「文藝週刊」を出し、多くの比格的好い作者を網羅し、發表された作品は殆んどみな非常に尖鋭であつた、就中、張露薇の「自村的風光」はいかに當時らしい作品であつた。

簡略であるが、この時期の概況は以上の通りであつた。要するに、滿洲文藝の發動期は五四以後であつた。初期の色彩は完全に小市民的であつた、進んで文藝團體が組織され、時代の進行に伴つて、小市民そのものの中に分化を起し、新興文學も若干の人々によつて提唱された、一九三〇年になつて滿洲經濟の基礎の動搖のために、比較的に我々の求める作品も産出された。

内容について言へばこの期の作品の大半は空虚であり、何もつかんではゐなかつた、實は滿洲に於いて意義ある材料を求めることは何も難しくはない、しかしこの時期の作品中にこの種の材料を利用して書いたものは見出せない、その原因は作者の社會觀察力が強くないこと、思想上に徹底した自覺がないことに在る。技巧の方面について言へば、記述に値ひする數篇とてもない、當時の滿

洲の作者はまだ材料を運用し得ず、まだ描寫し得なかつた、これは彼等が修養を欠いてゐるためである、それなのに多くの作者はなほ自ら狭い領域に在つて満足してゐる、一歩前進しようとしてゐない。同時に滿洲の文藝批評といふこの仕事が確立されてゐないのも遺憾である。

我々はこの時期の作品に對して自然不満足である、だが初期の成績は以上の如くすでに充分であつたらう、我々の期待は將來に在る、將來の成績に在る。

最後に、この時期に長篇で譯されたものには王譯のダヌンチオの「死の勝利」(泰東)、儒巧譯のユーゴの「レ、ミゼラブル」、大デューマ作の「モンテクリスト伯」(以上盛京)、直哉譯のデフォーの「ロビンソンクルソー」及び作の「小公子」(以上泰東)があつた。

右は康徳元年五月、六月の『鳳凰』に載つてゐる部分である。その『鳳凰』は第二卷、第二期三期であるが、その第三編の主要な目次を示すと次の通りである。

藝術的社會化與社會的藝術化
現段階的世界經濟

怡然
向華

現代戰之若干作戰的一般過程

滿洲文藝叢書

詩
雪夜送
天海

歌
生活的詩子
紅的一點
毒瘡

白蘭渡口的怪雜體(美國新作家哥德的散文詩)
高爾基的著作生活
五月雨(小品)

縮生 素食與肉食對於人體營養之比較
女戲子與少婦(趣味的對話)
緊瘦衣與高跟鞋

睨空
歐陽傳

海田次郎
君何

景珊
北明譯

白眉譯
何其

米勒
伍建

服裝展覽

婦女服裝美 旗袍的革新
年青姑娘的服裝美

秀中
琪子

女界諷刺畫

中國 巴金
年青 蓬子
作家 穆時英
之逸 徐轉蓬
話與 何家槐
消息

麗鵲女士輯

荒野生

畫評：我們狗和人（讀「廢手」）

晉波合作

前社會黨評議會女部

文泉

創作：賭徒

王芝

一個女招待的生涯自述

蕭倩

編後記

附注をみると「興」は「と」（及び）、「節」は「……の」、「高爾基」は「ゴオリキー」、「女
戲子」は「女役者」、「高跟鞋」は「ハイヒールの鞋」、「年青姑娘」は「若い娘」、「女招待」は「女給」で
ある。

これで見ると、この雑誌は言はば文化綜合雑誌を標榜してゐたことがわかる。また若い女性へ呼び
掛けよゝとしてゐたことも知られる。それと、詩歌の中に「栗田次郎」といふ日本名があることなど
も注目される。

創作を書いてゐる夏原、春日の石軍である。彼の長い作家經歷を知るべきである。
中國の若い作家についての逸話、消息があるのは、支那文化 上海文化への満系青年の關心を示
すものとも言へよう。それをちよつと、紹介してみると、巴金については

「目下の中國文壇で作品の最も多いのは巴金である、彼は佛國留學生である。彼は現在すでに三
十餘歳である、だがまだほころびた服を着た獨身者である、彼は奇妙な癖を持つてゐる、それは彼
は女を嫌ひなのである。普通の一般文學作家は多くは女の友達を有つてゐる、女の友達を追ふ、ま
るで韓信將兵の如くで、多々益々善しだ、だが彼は女と交際しない。彼の作品は澤山あるが、でも

彼は甚だ貧乏であると、いふのは彼は多くの友人を助けねばならぬからだ。彼は家庭はあるが、しかし彼は瀟灑生活を送つてゐる。彼は各處に旅行するのが好きだ、いつも旅行中に、書くものの材料を得る。書くことが彼の生活なのだ。」

また穆時英——この、和平陣營に来てテロに倒れた作家——の若い日の生活が語られてゐる。

「穆時英は若い色男である、『小説月報』に發表した「南北極」の一篇で文壇に出た。彼が光華大學に學んでゐた頃、教室では彼の姿は探し出せなかつた、だが光華大學は甚だ嚴格である、課毎に教務處から人が來て點呼をする、缺席が多いと退學の可能性が生ずる。ところが彼はその毎日缺席しても退學を命ぜられるには至らなかつた。何でもその點呼係は三十前後の未亡人だつた由。彼女は彼を甚だ愛してゐた。

彼の小説はうまいのだが、彼の舊文學は甚だ駄目だつた、そして光華大學の國文教師は老人で、教へるのも、書かせるのも悉く之乎者也矣焉哉であつた、彼はさういふ文字の筆法に巧みでなく、又起承轉收の語句も用ひ得ず、ために彼の國文は落第點だつた。彼に一つ悪い癖があつた、彼は同級生たちの新しい洋服を借りて着るのが好きだつた、一度借りると脱ごうとしない、若し再三要求しないと、脱れるまで着てゐるのでつた。人間は極めて聰明だつた、何でも多くの女同級生が彼のた

めに不眠症になつたといふことだつた。毎日午後、夕陽が西に沈む頃、よく彼が運動場の一角で、女友達と閑談してゐるのが見られた。誰にも彼に文章を書く暇があらうとは思へなかつた。彼は光華を卒業すると、ちようど父が死んだので、そこで彼は歸つて何軒かの家を賣り、思ひ切つて上海へ引越して來た。新文壇の各雜誌への原稿を書く外は、よく月宮跳舞場へ踊りに行つてゐる。

この『鳳凰』は飯河道雄氏の主宰下に發行されたやうである。飯河氏は東方印書館といふのを經營し、滿系のための教科書的書籍をいろ／＼出版してゐた。上海方面の文藝作品の選集なども刊行してゐる。飯河知君の父君だつた。『鳳凰』永く續かなかつたのは惜しい。

康徳十二年十月に『新青年』が創刊された。創刊號の内容は次の如くである。

民族協和之眞精神

英法德之航空政策

論法國古代民歌（法朗士）

體

鄭欣譯述

邵吼譯

三六九

讀書能率增進概論(高峰博)

筆迹 談小品文
直譯之故

藝術之意義及價值

宵行

淚的故事

生的開拓

灰色的命運與戰慄的人

詩 雨 外二章

暮 外二章

路人及初秋小景

明月集

無題

春日偶成

三七〇

金白 花子 楊赤 騷弟 天源 老穆 姜非 騷弟 可欽 成弦 楊任 西伯 前翰 人

陶醉罷
四個德國文人
秋菊

その「發刊詞」は日譯すると――

- 一、民族協和の眞精神を表現す
- 一、青年の思想を統一す
- 一、學術を探討し文化を發揚す
- 一、外來の思想不良刊物を尅制す
- 一、滿洲文藝を復興し並びに出版界の没落を挽救す

「新青年」の發行者は申傑、編輯は陳健男、蘇菲、成雪竹であつた。
寄稿者のうち、姜靈菲は會つて倦鴻と名乗つた人。

蘊文譯
哲文譯
陳健男

三七一

驪弟、天源、老參はすでに讀者に知られてゐる人々である。驪弟は後の金吾か。

『新青年』は協和會の奉天省事務局内に置かれた新青年旬刊社の發行であつた。

『興滿文化月報』も康德二年に創刊されたと考へられる。(私はその古い資料を持たない。康德五年一月に第四卷第一期が出てゐることから、さう推算するのである。)

『新青年』一巻四朝を見ると、「ALBUM(續)」といふのが劉爵青の署名で出てゐる。おや、と思つて、前號を見ると「ALBUM」は可欽といふ署名だ。すなはち知る、可欽は爵青であることを、なほ、遂丁も爵青だ。彼自身、いろんな筆名を使つた、一々覚えてゐないといふ程だから……。が、推算すると、彼は随分早く文學活動を始めたことになる。

『新青年』の康德二年新年號は通卷第六、七、八期の合併號で四六倍百頁の大冊。姜靈非の「灰色的命運與戰慄的人」が續き、劉爵青の「ALBUM」は本號で終り、ほかに朱雲の「昆蟲學教授」、盤古の「老劉的年」等が出てゐる盤古の「老劉の正月」は拙譯を『新東』に載せ、後に『原野』に收めた。

二月に出た十、十一、十二期合刊には遂丁の「哈爾濱」が出てゐる。すなはち爵青で、これは『滿

洲行政』に拙譯を載せ同じく『原野』に收めた。前後するが、『新青年』第五期には、爵青は劉佩の本名で「哈爾濱的獨唱者」といふ小説を發表してゐる。

大同報では同紙副刊に載つた文藝物を康德二年秋以降「滿洲帝國國民文庫」といふ叢書として刊行した。

第一集は『新小説』で、

愉快的故郷

平凡的事

天下太平

城中

誰是火種？

梅花村

蝦米

王道下的新生命

禾 浦 醴 馮 北 南 蕭 林
戈 生 徵 碩 里 波 然 篤

以上九篇が載つてゐる。些か玉石混淆の嫌ひはあるが、禾戈、鐙が當時活躍してゐたことを知り得る。

なほ山丁君の『滿洲文學閑談』を更に補遺的資料としてこゝに寫して置こう。

滿洲は、萬里人無き草原だと言へる。二、三百年前に、我らの父祖が漢民族の拓荒者となつた。その頃の滿洲には、何も無かつたが漸く揚子江流域出身の官吏が書翰文字、舊詩、詞文字を轉入しここに於いて地方の縣志といつた類の史書にも「藝苑」といふ欄が附け加へられることになつた。新文學が生れたのは最近二、三十年の事ではない。

私の記憶に最も深く刻まれてゐるのは關外社が刊行した『關外』である。それは滿洲新文學の河源を創造したもので、やがて『冰花』『現實』等の同人刊行物によつて引續がれ、多くの新文學の青年闘士が、舊文學、準舊文學（禮拜六派の白話文——大内註、民國初年上海で盛んだつた通俗小説作家の一派）とその腐儒を打ち破り、文化の上で一つの地位を獲得した。この時期を中國文學界

では「東北文學」と呼んでゐる。地理から見れば、滿洲は中國の邊陲に位置してゐる。文化の上では、滿洲も中國の邊陲であつた。中國でどのやうな變更が生じても、この邊陲の滿洲では事毎に中國よりは一步も二歩も遅れた。

東北文學の時期は、まさに中國の五四、五世運動後で、彷徨、苦悶の氣分が青年の血流の中で虐め始めた。『冰花』第一號の、碧赤の「國內文壇の轉變を論じ東北文學に及ぶ」で言つてゐる。「忘れてならぬのは、時代精神を持たぬ作品には偉大さが無いことである。東北社會の情形を分析し、時代の基調を把握して東北民衆の苦悶を描く、若しこの地歩に達し得なかつたら、東北文學は建設されず、國內文壇の注意を惹くことも出来ない。」

當時の文學者が、中國文壇の注意を惹き得ずして苦悶したのは面白いことである。「東北文學」から出て來た作家には、穆木天、張露微、林露融、李鳳萃、陳鏡秋、王一葉、張弓、趙鮮文、李榕のものもある。これらの中には現に中國文壇の健將たるものもあり、すでに消息不明となつてゐる大連一帯を包括し、北滿は哈爾濱、新京等數ヶ所を指してゐる。このやうな地域的區分は、一つは當時の作家たちの活動範圍から、一つは兩地の作品の風格がはつきりと異つてゐる所から來てゐる。

南滿の作家たちが盤踞した刊行物は、大連の滿洲報の「星期副刊」、奉天の民報の「蘿絲」、「冷霧」、撫順民報の「飄零」等で、發表した作品の多くは繊細優美、技巧的處理に重きを置き、たゞに詩歌と論争が盛んであつた。

北滿の作家たちが依拠したの哈爾濱の國際協報の「文藝週刊」、哈爾濱の公報の「公田」、新京の大同報の「夜哨」、「滿洲新文壇」で、これらの刊行物に登載された作品は、粗壯豪放を表現し、正確な意識的追求があり創作と戯曲が多かつた。異民族の文學の影響を受けた點から分折すれば、南滿の作家たちは多く日本、英米文學の黨染を受け、北滿の作家たちは露國文學の鞭撻を受けてゐるが多い。當時海外文學を移植した事情を見てもこの影響は相當なものであつた。「蘿絲」は専ら英米文學を紹介した。體蓬が多くの英國の詩歌小説を譯し、蕭梅は長篇「歐洲十九世紀以後と近代文學」を譯述し、八、九兩號ではヴィクトリア朝の大詩人テニソン特輯をやつた。その他多數の宗教味の濃い譯文の如き、若し後に孟素等の作家が加はらなかつたら彼等は基督教徒の作家だと誤認せしめたであらう。

「冷霧」は多く日本文學を紹介し又歐米の作品を譯載した。紀順夫が小泉八雲の文章を譯し、佩が「頽廢派とアランポオ及びボードレル」「自然派の詩」を譯述した如きである。反對に、哈爾濱の國際協報の「文藝週刊」では専ら露西亞文學が紹介された。代生が田園詩人エセーニンの詩歌を譯し、葆蓮がバベルの小説、ゴオリキーの小説を譯し、「夜の宿」を連載した。溫霽、慶淵の二人でゴオリキーの小説を譯し、玉符が「ドストエフスキー年譜」を譯し、GMがトルストイの童話を譯し、代生が「唯美主義文學の露西亞初期の文學に與へた影響」を譯述した等々である。

このやうに對立した移植は、當時の文壇に何も摩擦は生させなかつた。北滿の作家は從來南滿の刊物に注意を拂はず、南滿の理論家が論争で烏煙瘴氣をあげてゐる時、北滿の作家はすでに甚だ立派な作品を書き、「跋渉」「黃鸝」「小陸克」「小愛娃」等の作品集が相繼いで出版された。「跋」が北滿から南滿へ届き、各刊行物は争つて批判し珍しい收穫だと賞讃した。この南北滿の大きな溝はすうつと今日まで深い遺痕となつてゐる。だが一九三五年以後、北滿文學は毫も出色の作品がなく、甚だ凋落してしまつた。

「南滿文學」から出た作家には、秋螢（秋螢）、夢園（小松）、驥弟（金音）、洗園（勵行建）、孟素（孟素）、劉佩（爵青）、靈非（未名）、映影（田兵）、成雪竹（成弦）、文泉（石軍）、石

肇（陳因）等がある。これらの人は現在も括弧内の新しい筆名で滿洲文學創作に従事してゐる。南滿といふ土地の粘着力が執拗にこれらの作家にも粘りついてゐると言へる。

「北滿文學」から出た作家には三郎（蕭軍）、情吟（蕭紅）、洛紅（羅暉）、劉利（戈白）、代生（巴來）、默映、金人（金人）梅陵（孫陵）、文光、小古、黑人、達秋、努力（田瑯）等がある。或る者は粘性の土地を脱け出し括弧内の新しい筆名で國外文壇に活躍してゐる。或る者は筆を投げて「文學無用論」を唱へ、或る者は困つぷしの文章を書いてゐる。

多くの作家が出て行き、程なくまた多くの文學上の新進がその後を補つた。作家たちは漸次新京に集中した。この新活動によつて多くの立派な作品が出た。そして文學は終始その嚴肅な表情を堅持して現在に至つてゐる、これがこれまで日系作家によつて「滿系文學」と呼ばれ、日本文壇によつて「滿洲文學」と認められて來たものである。

滿洲文學は恰も愛すべき雛菊が温室に置かれてゐる如くに、この盛代に點綴されてゐる。

滿洲の文學作品は、批評家が言ふやうに「暗い！」。過去も現在も、どの創作もが農民の憂鬱、小市民の感傷、一般大衆の歎息を見出してゐる。憂鬱、感傷、歎息を以て滿洲文學を組み立ててゐる。これは時代の深く濃い陰翳でないのはない。だが、文學の本道に在つて、この陰翳は盛代に妨

げないものである。身に添ふ陰翳がなくては陽光の明朗さもないこと、むしろ陽光は陰翳が祈求するものと言ふべきであることを知るべきであらう。

現下の滿系文學者について見れば、作家たち——土地に粘着する作家たちは、身近な日系作家たちの激發扶掖を受け、その作品は人類の魂の門に進み入り、濃厚な時代の氣息を蒸發するに至つてゐる、近い將來史詩のやうな作品も生れることであらう。

今、私は私に隨つて南滿北馬各地を流轉した文學刊行物を讀へし、埃の中から頭を拾ひ上げて來ると、過去の、それら新文學開拓者の面影が又浮んで來る。彼等は非常に苦しい條件の下に在つた文學青年群であつた（原稿料収入はなく、無料で輸血するだけだつた）、彼等の手から、新文學の種子は時き繼がれて今日のやうな盛況になつたのである。彼等が私達に残した遺産は複雑、混亂して居り、且つ確かにそれは「寄生的」存在であつた。が、この存在は、粉飾に巧みな歴史家でも恐らく抹殺することは出來ないであらう。

歴史とは人間の歴史である。時間は英雄の敵である若し我らの作家が時間を征服し歴史を足下に踏まへ得ないならば、作家となるのも浪費であらう。

ここに、私は何も批評家たうとしたのではない。又作家たる友人たちを紹介しようとしたのである。

ない。ただこの盛大に生き、新生の希望が今年より展開するのを感じ、ために深く埋もれた過去を掘り出し、私達の新しい將來の歴史の糧にしようとしたのである。

山丁君の一文は「閑談」と題してはゐるが、滿洲文學の本質を語り、また、貴重な滿系文學史の資料をも提供してゐる。石軍は會つての文泉であること、映影すなはち田兵であることなどはつきりと知られるのである。

その後、私は泰東日報で衣雲といふ署名の「文壇十年印象記」四―六回を見付けた。全文でないのが残念だが、四―六回のみでもここに紹介しよう。(誤植などもあるやうだが、姑くその儘とする。)

……それに披露されたもので、叔文の「費家之春」、楊慶霖の「祈雨」等、そして我輩は更に「蝕的高梁」を以て、中國某作家の作品に雷同してゐるとの嫌疑で、筆戦を展開した、ほかに晶畫報での阿金の「修花匠」及び文藝畫報に馮傑が譯した「夜鶯與玫瑰」も一讀の價値あるものであつた。

この一年の新聞の副頁は、前出の「文學七日刊」「文藝週刊」「滿洲新文壇」「曉潮」「北風」及び、「明日」の外、民報には「平凡週刊」の誕生があり、泰東日報にはK.T.文研王編の「開拓

があつた。

「平凡」は蕭然、羌笛、牟罕、外文などが組成した社刊だつた。「開拓」は響聲「後身だ」といふことで、執筆者には金蘭、王鵬、致泉、老令、吳鳳凰などがあつた。

「平凡週刊」と並立したものに、民報に更に「大地」が發刊された、それは比較的優秀な文藝刊行物であつた。それに出た作品で人の注意を惹いたものに莫尼の「安祿山の死」及び豐三の「秋夜」があつた。前者は歴史故事を題材とした短篇創作で、後者は妾たちの性的苦悶を描寫したものだつた。撫順民報の二つの週刊「晨」及び「語絲」は比較的幼稚な刊物で、終始批評家の注意を喚起しなかつた。

この外に創作小説集に「風夜」(大内記す)これは今明といふ作者になつてゐて上海で發行されたといふ形式になつてゐる。今明は今の勵行建である。私は「風夜」から數篇譯し「滿洲行政」に載せ、また一篇は「原野」に收めた。及び「永遠的微笑」が出版されてゐる。そして大同報は更に「國民文庫」を發行した。毎月一度出版し、新小説、新劇本、新詩集三種に分けてゐる。(大同報―これは少し違ふ。上記の外に、學生文藝、傳奇小説があつた。)同紙の毎月の募集作品をまとめたものだつた。

一九三六年は滿洲文化が没落した年であつたと言へる、また出版業が停滞状態に陥つた年だつたとも言へる、以前にはまだ『鳳凰』及び『淑女之友』等の月刊の出版があつた。だが、この年には『新青年』、『興滿文化月報』及び『新民』等二三の刊行物が出ただけであつた。

『新民』は編者の低能のために、ずうつと文藝から隔絶してゐた、『興滿文化月報』は白虹氏が大いに努力したが、内容はなほ我々をして荒涼を感じせしめ、見るに足るのは『新青年』旬刊のみであつた。

それには僞書の「廢人」「天才者の悲哀」「住民墓地旁的少女」等の數篇が出た、作者の筆調は、中國作家の沈從文によく似、技巧も構成も獨特のものであつた。その外にまた黃曼秋の「戀曲」があつた、それは百八十行の長詩で、この荒蕪した園では珍貴な種子であつた。

新聞の副刊は、この年に増加はしなかつた、そしてそれまで比較的眞摯だと認められてゐた「開拓」「平凡」「大地」等は前後して停刊し、その他の歴史性を有つた副刊も、もとの状態を保ち得ず、一種の衰老した没落を形成した。

盛京時報の三十週年紀念の募集文は、題目は「いかにして滿洲文藝を振興せしめその獨立した色彩を持たしめるか」といふのであつた。それはひろく注意を惹き起したが、當選した作品は多く空

談で、切實でなかつた。同時に同紙には盛京文藝賞が設けられた。これは滿洲では全く奇學であつた。だがこの年度の該賞の獲得者は陶明齋教授の「紅樓夢別本」であつた。疑ひもなく、我々が熱心に期待してゐたのを失望させた。

この文壇の不景氣だつた一年に、我々が忘れてならぬのは、僅かに曇花一現的な『滿洲文藝』の出版であつた。それには老蕭（蕭然）の「寂寞」、楊進の「憂鬱」が出、比較的進歩した刊行物であつた、だが僅かに二輯を出して、永逝した。

この年、孫敬予の『小姐集』が出版された。疑ひもなく、これはこの文壇の没落した年の一つの喜ぶべき收感であつたらう！

一九三七年の一月、滿洲報副刊の編者趙孟原君は、文壇の再建設を謀るために、終に「北風」及び「曉潮」を合併して、「文藝專刊」とした。だが「文藝專刊」が十期まで出ぬうち、同紙は廢刊に宣告された。そこで我々の文壇は僅かに一片の荒涼さを剩さざるを得なくなつた。

しかしこの文壇の不景氣は、思ふに根本的な没落ではなく、まさに偉大なる潛修期であつた。といふのは我々の作家は、決してこのために寫作する熱力を失ひ去ることなく、終に一度の沈黙を経

て後、又『明明』なる純文藝雑誌が創刊された。

『明明』は曙光を代表した刊行物であつたと言ふことが出来る。我々のこの荒蕪した文壇に對して、相當に貢獻し得た。形式に於いても内容に於いても、我々に比較的好い印象を與へ得た。

年來、該刊に發表された創作には、田兵の「火油機」、古丁の「提琴」、「皮箱」、疑遲の「山丁花」、「北荒」及び「夜車」があり、これら數篇の作品のみを觀察しても、確かに相當に成功して居り、現實の表現に對してもやはり前進的であつた。

該刊の編者は陳毛利君で、その全力をあげて『明明』を健康な嚴肅な段階に邁進させるべく努めた。この一年中に、三つの特輯が出現した。それは八月號の創作特輯、十一月號の魯迅記念特輯及び十二月號の日本文學紹介特輯であつた。

創作特輯には六つの短篇が收められてゐた。古丁の「暗」、小松の「夕刊的消息」、田兵の「老師的威風」、疑遲の「江風」、徐狄の「雨夜」、露影の「請老師」である。これらを通觀するに、偉大なる成熟とは言へないが、粗製濫造のものでは絶對になく、少くともそれらは當時の文藝で多くを得られない作品であつた。

十一月號の魯迅記念特輯には毛利、羅綺、徐狄たちのこの文學界の巨人を哀悼する文章があつ

た。どれにも、熱淚をものとする追悼と悲壯な哀鳴を含んでゐた。そして古丁の「魯迅著書解題」は更に完全に魯迅一生の著述の概要を分析してゐた。まさに編者が後記に書いてゐるやうに、これは落葉林中の一枝の紅葉であつた。

十二月號の日本文學紹介特輯には、古丁、交泉、夷夫等六人の譯述を收めた。それは我ら直接に日本文學を讀み得ない者に一つの甚だ好い食糧を供給した。

一九三八年に至つて『明明』は更に新しい企圖を有つた。質の充實の外に、量も前に比べ幾らか増加した。一週記念號には百紙長頁の古丁「原野」及び松の「洪流の蔭影」が出た。この二篇は當時の文壇に於いて大きな波紋を惹起した。各刊には續々批評文字が出現した。この外、外文の「鑄劍」があつた。二百行の史詩で、それは詩人に一條の新しい路を開いたものだつた。

その他、各期に散見した石軍の「駝背嶺」、田兵の「阿丁式」、養摩の「鄰三人」、「十天」等は、物語の結末に於いて悲觀沈落の描寫がなく、一條の明朗な出路を暗示し、この年の文壇の珍貴な收穫と言へた。

この年、明明社は「萬民の需むる所」といふ口號で、「城島文庫」を刊行した。第一輯は古丁の「奮飛」で、「吉生」「頤收」「莫里」「原野」等八つの短篇創作が收めてゐる。古丁君の一九三三年から

一九三八年に至る結晶作である。第三輯は疑蓮の『花月集』で、『山丁花』『江風』等が收められた。多くはすでに『明明』や『新青年』に載つたものであつた。第三輯は小松の『編纂』で、『病患』『夕刊的消息』『月亮落了』等九つの短篇がある。この外に古丁の『雜文集』『一知半解集』、『百靈の詩集』『火光』が出版された。

『城島文庫』の刊行に繼いで『詩歌叢刊』の出版を見た。既刊の詩集に古丁の『浮沈』、『百靈の未明集』、『小松の『木筏』、『糸絃の『青色詩抄』がある。

本来彼等は城島文庫の刊行の辭で「萬民の需むる所」「文化と萬民の距離を短縮さす」といふことを高く叫んだのであつた。ところで彼等の『詩歌叢刊』は、僅か百部を印刷したといふ笑ひ事をやつた。先には人々は奇蹟的に待望したが、漸次惡意ある攻撃に轉じて來た。

最初、吳郎が大同報で『豪華的外衣』を發表し、彼等の寫印の態度を指摘した、繼いで系巳が『華文毎日』に『文化人的本體』を書き吳郎の文章と相應じた。之に因り『明明』は古丁、辛嘉、島人等の答辯の文字が出、そこで文壇で白熱的な筆戦が形成された。

不幸、『明明』はこの年の九月に停刊を宣告した、これまことに文壇の最大損失であつた。

四年の歴史を持つ『新青年』は、依然進歩もせず退歩もしない態度で進んでゐた、年來、同志で

意に滿つ作品としては、『爵青の『巷』群像』、『今宵の『夜會』可欽的某夜』、『男與女』、『信風の『井』亡命前記』、『老翼の『人行篇』疑蓮の『拓荒者』、『採庵の『老劉的煩惱』、『桂林の『男女們的塑像』、『蘇克の『雪地的嫩芽』等が擧げられよう。作品は顯らかにそれぞれ風味を持つてゐたが、しかし讀者の飢餓を療治した點では同じ力を持つてゐた。

この外に擧ぐべきは『斯民』であらう。以前には同志は文藝に對しては重きを置かぬものの如くであつた。がこの年には、吳郎氏が大いに努力したので、文藝の推進にも相當な貢獻があつた。同志の作品を最も多く發表したのは吳瑛であつた。彼女は曾つて璣子、小美等、幾つかの違つた筆名で多くの成熟に近い作品を同志に發表した。『野孩子』『女叛徒』『庸醫』『新幽靈』等である。これが彼女がこの一年に『斯民』で努力した成績であつた。この外、梅娘の『迷落』『風塵』『應談受罪的人』等はみな極めて整つた人生の描寫で、輕浮な滑のた筆調は少しもなかつた。

『跑關東』を以つて人々に注意された郷土作家山丁氏も、同志に前後して『郷土與郷土文藝』及び『郷土文藝與山丁花』を發表し、多くの反應と共鳴を激起した。この外また華希の中篇『大荒』も年末に同志に連載された。

以上二つの事實から、我々はこの刊行物に大き期待を持つやうになつた。少くともそれはもはや

文藝を漠視し、文藝から遠隔しなくなつたのである。

新聞紙上の文藝では、前には泰東日報の文藝週刊等があつたが、この年には大同報の「文藝」が比較的見るべき刊物であつた。だが過去の「滿洲新文壇」に較べると、質に於いても量に於いてもともに貧弱であつた。尤も該刊でも時には比較的好い作品を載せた。梅娘の「道」、蘇克の「自春但秋」、瀟菱の「不開花的春天」、終の「橋畔之家」及び百芷の「廉捲四風人似黄花瘦」等の如ききである。この外、麗娘、小松等の散文も一讀に値ひするものであつた。「明明」の停刊から、我々の文藝界は曾つて一度は没落の姿に沈んだ。それで我々の作家は、足を海外に投ぜざるを得なかつた。例へば小松、金音、系巳、田郷等、みな前後して大阪の「華文毎日」を彼等の活躍の地盤とした。

同時に「新青年」月刊は、成茲氏により一再ならず改進され、一九三九年の新年號に於いて、同誌は一進歩の烙印を我々に蓋した、の二百餘頁の刊物に、我々はま事に少しの浪費も見出せない。新年號には小説の特輯があり、六つの短篇が收められてゐた。袁犀の「海岸」、袁馳の「豐收之夜」、古丁の「鏡花記」、孟原の「窓效」、鮮文の「小北河」等、ともに整つた創作で、これは「明明」の創作特輯とまさに好個對照であつた。また我々のこの久しく冷淡たりし文壇で、糜爛なる點

綴を加へたとも言へた。

この一年に、同誌には二つ半の中篇が載つた。それは石軍の「債」袁犀の「流」と、爵青が同誌に一部分を載せて中止した「夢」であつた。「債」と「流」はともに極めて鋭い筆で、人物を立體的に刻み描いてゐた。殊に石軍の「債」は救ひのない農民を深く刺した一篇の力作であつた。

三八年以降、「新民」が文藝に接近してから、同誌の編者は極力前進せしめようとした。量的方面では貧弱であつたが、質的方面では相當の充實が見られた。

この年、同誌に作品を最も多く發表したのはやはり吳瑛であつた。我らのこの進歩的な女作家は、この一年中に、「兩極」析「霧」詭「錢四嫂」等を發表した。外には小篇の「拉加」、文才の「古墓」、權東の「高六子」、金展の「醫」、舒柯の「秋」、里雁の「夜」、これらの作品も我等に好い印象を與へ期待させた。

奉天の「興滿文化月報」はこの年、姜雲飛の主編で、新しい改善と企圖がなされたやうであるが、内容はなほ空虚と貧弱を掩ひ得なかつた。この外、李四園主編の「婦女雜誌」は同年四月號で、創作特輯を出した。執筆者は多く新人であつた。がそれら作品には水準に達しはものは見出し難かつた。

新東京の文藝界は、これまで全滿文壇に覇を稱へて来た。それは新東京が文化の中心地であり、多くの作者たちを擁して居り、實力も甚だ雄厚だつたからである。だが『明明』停刊後は、沈悶と頹廢を呈示した。だがこの年、新東京の數人の文筆人の努力により、終に又一つの大型の同人雑誌が誕生した。それはすなはち『藝文志』である。

『藝文志』は『明明』後身だと言へる、不定期の純文藝刊行物である。内容、形式とも二進歩的であつた。彼等は自ら誇ることをせず、また互ひに標榜もしなかつたが、發表された作品はみな相當な水準のもの、相當に成熟したものであつた。第一輯のみを見ても、誇るに足る。

第一輯には、脩青の「蕩兒歸來的日子」がある。全篇の題材は頗るジイドの「蕩兒歸る」に似てゐる、そして構成と技巧は又頗る巴金の風格を有してゐる。その外、夷馳の「祈禱」、小松の「施忠」及び譯文では古丁の「一夜」外文の「春香傳」の如き、偉大なる成熟とは言へぬが、また決して人工で通られて産み出された作品ではなかつた。

やがて、同年の十二月、奉天でも同人雑誌『文選』が創刊された。これも二百三十餘頁ある純文藝刊行物であつた。疑ひもなく、滿洲の文藝界は、すでに昏迷の黎明期へ踏み入りそして健壯の段階へ邁進したのだつた。

同誌の第一輯で、すでに全滿の名家を網羅し、十一の短篇創作を收めてゐた。量の方面だけから言つても我々を驚かすに足りた。そして質の充實は、更に欣喜に値ひした。例へば山丁の「狭街」、小松の「赤字會計」、姜霞菲の「三人行」、白樺の「飲血者」脩青の「白痴知識」の如き、技巧も結構もみな相當に洗練され成熟したものであつた、その外、石軍の「擺脫」、田兵の「同車者は、ともに熟練した大衆語を以つて、農村の現實をつかみ、作者は偉大な同情と愛で、絶境に住む農民の必死のものがきを描いてゐた。更に吳映の「翠紅」、梅娘の「傍晚的喜劇」及び崔東の「日子」は幽默の筆調を以つて沈痛な物語を描き出してゐた。

大同報の「文藝」はこの年編輯者の交迭のために二つの違つた傾向を示した、すなはち梁世録が編輯に當つた時代には新人の發掘に相當に努力し、堅矢が編輯するやうになつてからは特輯と紹介に傾いた。

同年該刊には、前後して批評、譯文、詩歌及び婦女文藝等、幾つかの甚だ價値のある特輯を出し、文化の推進に相當の貢獻をした。その外に海外文學紹介特輯が半月毎に一回出た。それには海外で活躍してゐる數人の作家が原稿を提供した。内容は譯文に重きを置いた。執筆者には田郷、張荷、烟塵、呂風、梅娘、馬遠、系巴諸氏があつた。

年來該刊で最も活躍し、最も努力した作者としては、馮雪笙を推すべきであらう。この一年に、彼は該刊に連続して三つの戦争文學を譯した。それは大野葦平の「海と兵隊」「土と兵隊」「麥と兵隊」であつた。この外に「小説的立體的透視」等があつた。だがこの天才的熱力を有してゐた作者は同年七月世を逝つた。これは我が文壇の一大損失であると言はねばならなかつた。該刊にこの大いに心血を洒いだ作者を追悼すべく、「記念故雪笙專號」を特輯した。執筆者は吳郎、吳瑛、山下、夷駒等、多く雪笙氏生前の故友で、收められたものは悲哀な情緒の文字に満ちてゐた。

この外、同紙に連載された長篇に、玉則の「晝與夜」、夷駒の「同心結」があつた。この二篇は文壇で大きな波紋を捲き起し、文壇に長篇創作の風習を提起した、これは同紙の新し功蹟であつたとしなくてはならぬ！

晝與夜は流暢な大衆語で、農村での幾年代に演ぜられた物語を描き出したものであつた。同心結は感しい暴風を以つて一幅の生動する物語を綴り成したものであつた。だが作者の過去の郷土味に富んだ短篇を以つて見れば「同心結」は疑ひもなく失敗であつた。その外、「健康滿洲」には吳郎の「斷續層」があり、泰東日報には黃旭の「失了方向的風」があつた。ともにこの年度の大きな收獲であつた。

最後に言はねばならぬのは吳瑛の小説集「兩極」の出版である。それには「霧」「折」「兩極」等、十の短篇が收められてゐる。ともに極めて整つた人生の寫照である。作者は女性の眼を以つて、地位を持たぬ、舊式の女の灰色な人生の悲哀を描き出した、嚴肅な緊練された筆調の中に、ゆるがせに出来ぬ人生味が躍動してゐる。

一九四〇年は、詩運建設の一年であつたと言へる。我々が健忘症でないならば、「冷霧」停刊後、我々の詩作者は一時消沈し一九四〇年に至つてやつと活躍猛進を示したことを思ひ出すであらう。

單に詩刊のみについて言へば、楊野が主編した「詩歌連叢」があり、前後して「地平線」「風景線」が世に問はれた。新京では山下、夷駒が主編した「詩季」が出、顯らかに滿洲詩壇に一條の明らかな粗線を透出した。

「詩季」は時作、詩評、詩話、譯詩の四部に分け、全滿の詩作者を網羅した。それは詩壇に一大波紋を激起した。執筆者には洪流、未名、支禾、醉菴、小松、金韓、楊野等三十餘名の詩作者があり、滿洲詩壇上空前の創舉を形成した。

同時に「新青年」月刊でも、毎期、新詩歌特輯をやつた。「詩季」が世に問はれてから終つた。

『新青年』本年の創作は、何としても以前より貧弱であつた。だが此處でも數篇の成熟した作品が出現した。看軍の「奔流」、荷青の「大觀園」、崔東の「十二蒸燈」及び未羅の中篇「一家」等の如き、何れも我々の文壇に於いて多く得られぬ作品であつた。

『新民』も詩運の再建設に應援するために、「詩運建設特輯」を出した。執筆者は己に名を成した詩作者の外に、文壇上の詩人も廣く含んでゐた。記憶にある作者には山丁、吳郎、魔女、駱子、峻巖、老翼、崔伯常、陳維等の詩作と詩話があつた。

新年號の刊首の「一九四〇年の話」に、我々はすでに該刊の野心と企圖を見出し得る。該刊はまだ理想の夢境には達しなかつたが、事實上一つの進歩の烙印を押したのであつた。

この一年に、該刊の前記特輯の外に、「新人創作展」といふ輯成をやり、新人の發掘に相當の熱力を盡した。執筆者は劉漢、胡琳、孟語、柯炬、克夫、娜蓮六氏であつた。そして劉漢の「早魃」は殊に極めて優れた郷土代表作で、文壇の注意と好評を激起した。この外、冷廠の「前路」、克夫の「過禮」、寒護の「平在上海」、未名の「暗屋之書」及び柯炬の「悠遠の家」は同年度の文壇での貴重な收穫であつた。

筆者所持の良書の一文は右で終つてゐる。ここにも、種々と資料が提供されてゐるのを知り得た。

いま『明明』の創刊號を見ると、それは昭和十二年三月の發行であり、稻川朝二路氏が主幹となつてゐる。

創刊號は今日の「麒麟」とあまり違はぬやうな、大衆向きの編輯である。ただ、創作に古丁の「又一年」、百靈の詩「敏子」更之平（古丁）の雜文「閑話文壇」、ゴオリキ「本」(劉郎譯)等が文藝の範疇に屬するものである。

第三號には古丁の「皮箱」「山丁花」が出た。同號に「大連文藝界小紀」(野見)といふ一文があり、袁夫、田軍等が滿洲筆令を作つた。王文泉の北上作、滿洲筆令も不振になつた。留日した學生により「遼水週刊」が出てゐる。大連には翻譯者は多いが、作家は少い、といふやうな旨が書いてある。

第四號には、青年書局主催で日、滿文藝座談會を新京圖書館で催した旨の記事がある。

第五期に田兵の「丁村の年暮」、苦土の「皮鞋」、疑蓮の「雁南飛」、古丁の「小巷」が出てゐる。

第六期付前出の創作特輯、なほ秋螢の「滿洲新文學的踪跡」二十六頁がある。これまた些か主觀的に過ぎたとは批評されたが、豊富な資料を提供した一文であつた。なほ、この號で稻川氏は退いてゐる。更一第ニ卷第一期に同じ題で楊華の一文がある。これも一見に値ひしよう。

なほこの頃、林野民が日本文による詩集『新しき感情』を東京で刊行してゐるのが注目される。

なほ又、話題が別になるが、康德四年末に滿洲弘報協會の肝煎りで文藝觀話會といふのを開催し、滿洲文藝協會の設立を議したことがあつた。仲賢禮、磯部秀見、赤川幸一、穆六田、吉野治夫、奥村義信、大内隆雄、今井一郎、坪井興、武藤富男、板垣守正、柴野爲玄知、杉村勇造、陳松齡等がこの會に参加した旨、『明明』二卷四期の記事にある。

秋螢の『新青年』第五十八號（康四、七）以下に「滿洲新文學之發展」を寄せてゐる。『新青年』第六十一號（康四、九月）は日支事變特輯であるが、同號に秋螢の「滿洲創作界小願」がある。『明明』の創作特輯の作品を批評したものである。また同じ號に可欽の「妓街與船上」がある。「妓街與船上」とは、後を譯して「滿洲行政」に寄せたところ、削除されてしまつたことがある。

康年五年一月の『新青年』には方志の「文壇一年的回顧」がある。
同年三月の『明明』は前出の一週年記念號、「原野」などが載つた分で、百六十頁の、豊富な一冊。

『明明』三卷四期には、夷馳の「黃昏後」、小松の「人絲」、石軍の「風雨」、李妹の「玩弄着青春」、君歐の「霧」等の佳作が出てゐる。

『新青年』康德六年十一月號には小説特輯があり、崔東の「家行記」、舒楓の「舞台」、老實の「記姐姐」、田兵の「砂金夫」、小松の「舟」、夷馳の「廣」が載つてゐる。

ここで『藝文志』について書くべき順序となつた。前引稿にもあるが、『藝文志』第一輯は康德六年六月の刊行である。岡田益吉が「滿洲の文壇者に望む」といふ一文を寄せ、齋藤氏の「金石叢談」があり、少虬の「鄭海藏先生の詩」（鄭孝胥氏の詩について書いたものである。）があり、醉香、玉則（「列女傳」）、石軍、小松、夷馳、西原、君頤、金音、袁廉が筆を並べてゐる。私の「未定成的文學目録傳」といふ一文も中に插まつてゐる。いろいろなものを選ぜるといふ始めからの建て前だつた

のである、四六倍二百十余頁、重厚味を持った出發であつた。

その第三輯は同年末に出た。今度は三百六十余頁といふ前にもましての大冊。古丁の「平沙」、小松の「蒲公英」はこれに載つたのであつた。ほかに、李夢周の建國文藝當選作「春の復活」、若嶺の戯曲「金絲籠」、百靈の史詩「成吉思汗」（これは第一輯からの續き）、寶熙、劉恩格、陳蒼虬の舊詩、長谷川藩の「大同大街」を共鳴が譯したもの、木崎龍の「我的文學十年」等があり、更に創作に夷馳の「郷仇」、石軍の「麥秋」、爵齋の「廢墟之書」、老穆の「馬成驗」、勵行建の「桃色輪廓」があつた。

『藝文志』第三輯は康徳七年六月の刊行、實に四百二十余頁の大冊で、日本紀元二千六百年紀念特輯を含み、次のやうな内容であつた。

特輯

- 藝文雅頌
- 奉祝二千六百年
- 日本文學的特性

- 榮厚
- 沈瑞麟
- 大内隆雄

日本文學的語言

日本與唐

關於明治大正的二名作

古事記選譯

芭蕉俳句選譯

井原西鶴

海彦山彦

阿部一族

紀元二千六百年紀念東亞操觚者懇談會經過實錄

現代朝鮮文學論

和蒼虬牽牛花

奉還元初太守柳樹圖

- 杜白雨
- 非斯
- 木崎龍
- 光天
- 百靈
- 武者小路實篤
- 古丁
- 山本有三
- 外文
- 莫森
- 疑
- 李育雨
- 劉思格
- 昨非

牡丹園雅集分詠得花字

讀張文襄公杜少陵詞感賦

三代金文中女姓釋例

旅窓即稿

閑話北京

半生之記

我的語錄

半生雜詠(詩)

漂流曲(詩)

馬家溝

麥(二百枚)

創 鐵檻(百枚)

作 窪 地

回 歸 線

四〇〇

少 虬

眞 如

羅 頤

辛 嘉

少 虬

北村謙次郎

莫 伽

外 文

刁 陵

竹 內 正 一

共 青 譯

爵 松

小 軍

石 軍

疑 遲

戲 金 泰 棧

劉 漠 寒 (獨幕)

春秋 (四幕)

編 輯 後 記

杜 白 雨

君 頤

辛 寶

右の内、山本有造の「海彦山彦」を勧めたのは私であつた。本崎龍君の「明治大正の二名作について」も書き卸しの力作であつた。

『藝文志』と對應するやうに、『康徳六年十二月』奉天から刊行されたのが『藝文志』であつた。同じく大型刊物で二百二十余頁。

その内容は――

刊行緣起

三個運動

西〇一

秋 螢

滿洲文學別論

藝文志考糾謬

狹街

赤字會計

H子

擺脫

傍晚的喜劇

五個夜

北京

文・影・劇

消閑雜記

浮瓜沉李

翠紅

同車者

四〇二

石卒

山靜

小丁

崔東

石軍

梅娘

李喬

成弦

。 遲郎

古丁

吳郎

吳瑛

田兵

二人行

飲血者

白癡知識

分配

運命的人

姜、老店(戲曲)

後記

姜、癖

白樺

。 島村

共鳴

李、之

安、尾

『文選』の第二輯は翌年十月に出た。收むるところ――

創作・戲劇

贖坑

牽牛花

集鐘

明鈴

秋螢

石軍

山丁

夷馳

四〇三